

大阪府立大学 環境報告書

Osaka Prefecture University
University Social Responsibility Report

2021 年度版

目次

- 1 Top Message
- 2 キャンパス情報
- 3 環境報告書（最終号）の発行に際して
編集方針
- 4 トピックス

第1章 環境活動

- 6 環境部エコロ助のこれまでとこれから
- 8 キャンパスビオトープの保全活動
- 10 大阪府唯一の村で棚田保全活動
- 12 学生が活躍する大学に
政策提案が優秀賞を受賞
- 14

第2章 環境研究・環境教育

- 16 積極的に学び、総合力・判断力を身につけよう！
- 18 つながりのあり方を根本的に考える
- 20 元気！生き生き！女性研究者支援
- 22 SDGs達成に向けての取り組み
- 24 学んだことを誇りに
- 25 「自分ごと化」することが重要
- 26 環境人材育成の10年
- 30 環境活動演習からの報告

第3章 環境パフォーマンス

- 36 エネルギー使用量及び二酸化炭素排出量の推移と現状
- 40 環境報告書に見る省エネ活動
- 42 廃棄物の排出等の推移と現状
- 44 上水使用量・中水利用量・下水排水量の推移と現状
- 46 マテリアルリバランス

第4章 環境マネジメント

- 48 「大阪府立大学環境報告書」の10年
- 51 2020年度目標に対する自己評価

- 52 E~きやんぱすの会のページ
- 54 最終号の発行に寄せて
- 57 (参考) 大阪府立大学環境理念
- 59 外部評価

表紙

青空の下、中百舌鳥キャンパス
白鷺門付近にて枝葉を
四方に広げる櫻

国連が呼びかける
SDGs（持続可能な開
発目標）と各記事の
関わりを示すため、
それぞれ関連する
SDGs のアイコンを
付しました。



“大阪公立大学の環境取り組みに向けて”

1972年6月、スウェーデンのストックホルムにおいて、環境問題に関する初の世界的な会合「国連人間環境会議」が開催されました。環境問題が地球規模かつ人類共通の課題であることが国際社会で共通認識され、そのスローガン「かけがえのない地球 (Only One Earth)」は今も人口に膾炙しています。同年11月には「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」の採択、12月には「国連環境計画 (UNEP)」の設立という、環境にとって大きな前進の年となりました。

1992年6月、ブラジルのリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国際会議 (地球サミット)」では、環境と開発は互いに対立するものではなく共存し得るものとする「持続可能な開発」を基本理念とし、その考え方は宣言文に取り込まれ、行動計画アジェンダ21で具体化されました。そして、最近よく話題になっている「持続可能な開発目標 (SDGs)」へとつながっています。



ストックホルムで「国連人間環境会議」が開催された頃、日本は高度経済成長を遂げる一方、大気汚染や水質汚濁等により人々の健康が蝕まれ、生態系が破壊されるという深刻な公害が各地で続いていました。1971年に環境庁が設置され、さまざまな規制が導入・強化された結果、日本の公害は徐々に改善され、21世紀に入るとより良い環境を将来に亘って維持するため、自主的な取り組みが重要視されるようになりました。

その仕組みの一つが、2005年に施行された「環境情報の提供等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」(環境配慮促進法)で、国立大学など国の機関には環境報告書の発行が義務付けられ、本学など公立大学は努力義務と規定されました。

同法の施行後しばらく、本学では環境報告書は発行していませんでしたが、その状況に危機感を抱いた学生たちが自分たちで環境報告書を作成することを提案、2011年に「環境報告書作成学生委員会 (E~きやんぱすの会)」を組織し、翌2012年、環境報告書の初号発行に至りました。学生が主体となって原稿を作成し、大学がこれをサポートする「府大スタイル」の始まりです。これは全国でもユニークな取り組みとして注目され、E~きやんぱすの会が大阪環境賞準大賞を受賞し、同会の代表者がNPO法人から表彰されるなどしました。

大学統合により「大阪府立大学環境報告書」は2021年度で最後となります。ここに記念すべき第10号を発行できることを、輝かしい歴史とともに誇らしく思っています。

来たる2022年度は、ストックホルムの「国連人間環境会議」からちょうど50年、リオデジャネイロの「地球サミット」から30年に当たり、その大きな節目の年に大阪公立大学がスタートします。新大学は、大阪の発展を牽引する「知の拠点」となり、世界レベルの高度研究型大学を目指すこととしています。これまで実績のある環境研究・環境教育を引き続き推進するとともに、大学自身の環境配慮の取り組みも改めて強化したいと思います。また、学生が積極的に関わって環境報告書を作成するスタイルは、新大学で新しく構築する環境マネジメント体制の中で継続したいと考えています。

最後になりましたが、新型コロナウイルスの猛威は未だ終息に至らず、ウイルスが原因の死者や新規感染者数が日々報じられています。亡くなられた方々のご冥福、並びに現在治療中の方々の一日も早いご快復を心からお祈り申し上げます。

2021年11月
大阪府立大学学長 辰巳砂 昌弘

キャンパス情報



キャンパス合計

土地面積	635,861 m ²
建物延面積	280,053 m ²
教職員数	879名
学 生 数	8,568名

(2020年5月1日現在)

担当:E~きやんぱすの会

環境教育研究センター事務局

—環境報告書（最終号）の発行に際して—

あれから10年も経つのか。正直な感想です。福永真弓先生にE～きゃんぱすの会の顧問をお願いし、学生有志を中心に作り上げた大阪府立大学環境報告書創刊号。その後も学生中心の「府大スタイル」は綿々と受け継がれ、学内外で高い評価を得ることとなりました。今号で大阪府立大学環境報告書は最後となります。来年以降も大阪公立大学環境報告書として「府大スタイル」を引き継ぐこととなります。これまで蓄えてきた経験を生かし、さらに洗練された環境報告書が生まれ出されるような環境整備に努めたいと思います。



大阪府立大学副学長
環境教育研究センター長
大塚 耕司

編集方針

『環境報告書の作成に当たって』

本環境報告書は大阪府立大学環境理念（p57 参照）を受けて、2020年度の大阪府立大学の環境面における社会的責任（USR）に関する活動の成果を取りまとめたものです。

第1章では学生団体等による環境活動を、第2章では環境に係る教育・研究活動を紹介し、第3章では環境パフォーマンスを取りまとめ、第4章では環境対策推進目標に対する自己評価を掲載しています。

原稿の作成・編集は学生有志で構成する「環境報告書作成学生委員会（E～きゃんぱすの会）」が行い、外部評価の後、学内の意思決定機関である「大学執行会議」（議長：学長）に諮り、「大阪府立大学環境報告書（2021年度版・最終号）」として公表しました。

発行の所管は学内組織である研究推進機構 環境教育研究センターが担っています。

対象年度

2020年度（2020年4月～2021年3月）

対象とした範囲

中百舌鳥キャンパス
羽曳野キャンパス
りんくうキャンパス
工業高等専門学校
I-site なんば

対象とした活動

本学全体の教育研究活動、学生団体の活動（教員の研究室内の活動の一部、大阪府立大学生活協同組合の活動の一部等、独立した活動はデータに含まれない場合があります。）

発行年月

2021年11月

担当：E～きゃんぱすの会
環境教育研究センター事務局

本学ではさまざまな学生団体がユニークな環境面の取り組みを行っています。



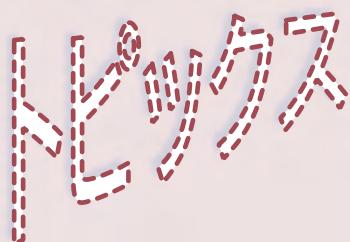
園児向けのエコレンジャーショー

- 【6 ページ】環境部エコロ助のこれまでとこれから
- 【8 ページ】キャンパスビオトープの保全活動
- 【10 ページ】大阪府唯一の村で棚田保全活動



キャンパス全体をビオトープとして保全

本学では SDGs にもつながる幅広い環境研究・教育を実践しています。



ニュージーランドで
エコ・スクールの
実習を展開

- 【16 ページ】積極的に学び、総合力・判断力を身につけよう！
- 【18 ページ】つながりのあり方を根本的に考える
- 【20 ページ】元気！生き生き！女性研究者支援

「大阪府立大学環境報告書」の最終号として、これまでの環境活動や環境人材育成などの取り組みを振り返りました。



省エネキャンペーンで
省エネうちわを配布

- 【12 ページ】学生が活躍する大学に
- 【26 ページ】環境人材育成の 10 年
- 【40 ページ】環境報告書に見る省エネ活動
- 【48 ページ】「大阪府立大学環境報告書」の 10 年

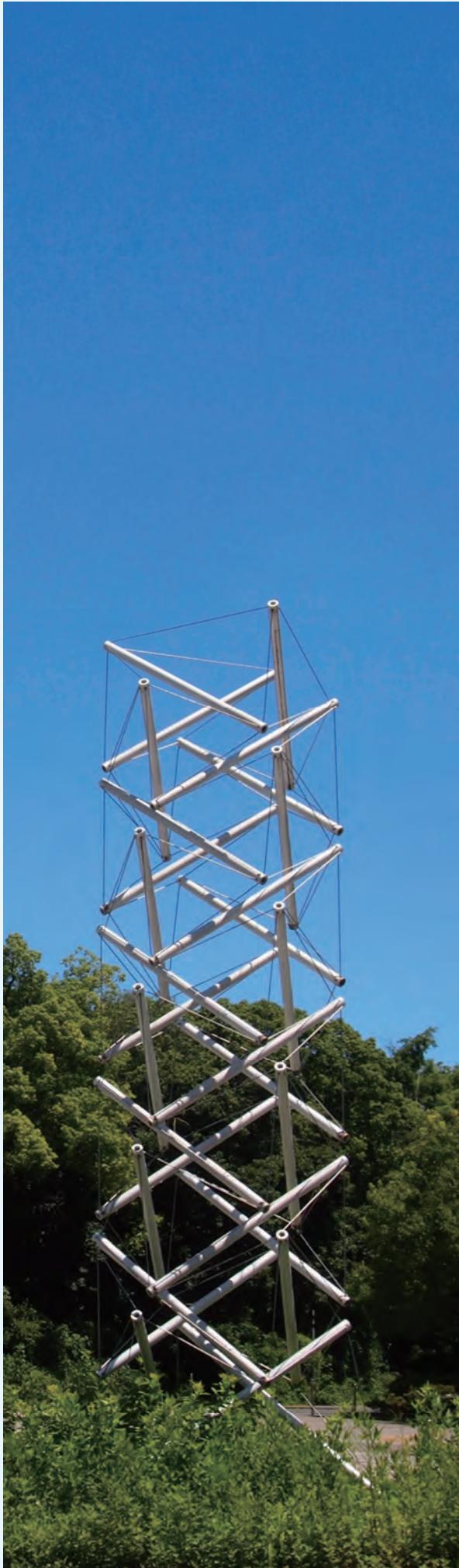


世界環境デーに因んだ府大環境デー

第1章

環境活動

本学の学生団体や教職員が展開している様々な環境活動の内容を紹介しています。



環境部工コロ助のこれまでとこれから…	6
キャンパスビオトープの保全活動…	8
大阪府唯一の村で棚田保全活動…	10
学生が活躍する大学に…	12
政策提案が優秀賞を受賞…	14

多様な活動と総括

環境部エコロ助のこれまでとこれから

環境部エコロ助は・・・

本学を中心に環境活動を行っている団体です。学内外を問わず、多くの方々に環境問題を身近に感じてもらえるよう「できること・気づいたことから、楽しくエコ活動」を理念に掲げ、2001年から活動を行っています。5人のサークル活動から始まったこの団体も今では68人で多様な活動を行っています。ここでは大阪府立大学最後の環境報告書として、最近の活動を交えながらエコロ助のこれまでの活動を紹介していきます。

子どもたちに向けた環境啓発

エコロ助の個性的な活動として、エコレンジャーショーを行っています。このイベントでは身近な環境問題を題材にしたヒーローショー、ゲーム、エコ工作を園児を対象に行い、園児たちが環境問題を知るきっかけを提供しています。2004年から始まり、年に1~2回の頻度で行つてきました。2020年度、2021年度と会場の確保ができず活動は休止中となっています。



園児たちに人気のエコレンジャーショー

学外におけるごみ拾い

学外でのごみ拾いボランティア活動も積極的に行ってています。地元の大泉緑地、大仙古墳から、北は万博公園（吹田市）、南は長松海岸（岬町）まで様々な場所で行います。ごみ拾いは身近な環境活動として、町の美化を目指すだけでなく、ごみ問題を考えるきっかけにもなります。2020年度は大阪府立大学、大泉緑地

を中心に行い、2021年度は長松海岸、石川（藤井寺市）、大泉緑地を中心に行いました。

ロックフェスでの清掃ボランティア

環境部エコロ助は地元堺市で毎年開催されるロックフェス「SAKAI MEETING」の清掃ボランティアを行っています。主に会場でのごみの減量・分別を担当しています。2016年度から毎年参加していましたが、2020年度からSAKAI MEETINGは中止を余儀なくされ、開催を待ち望んでいます。



SAKAI MEETINGにおけるごみ分別の協力

学内資源のリサイクル、リユース

エコロ助では大学内で発生する資源循環のための活動を行っており、その1つが自転車のリユースです。自転車が必要なくなった卒業生から無料で譲り受けた自転車を修理し、2,600円と安価で販売しています。2010年度から年間約20台を販売しています。

また、学内で販売されるリリパック弁当の容器を回収し、業者の方にリサイクルしてもらっています。食べ終わった容器のシートを剥がして回収ボックスに入れてもらうことできれいな容器としてリサイクルすることができます。しかし、回収率が悪いとリサイクルする過程で使用するエネルギーの影響でかえって環境に悪影響を与えてしまう問題を抱えており、回収率を高めるための周知活動も行っています。



農業



千早赤阪村の幻想的な棚田夢灯り

中百舌鳥キャンパス内で農地を借り、花や野菜づくりを行っています。馬術部の協力の下、処分に困る馬糞をたい肥にして有効利用しています。2021年度はさつまいも、落花生、コスモスを育てました。

また、2018年度から千早赤阪村の棚田保全活動にも協力しており、「棚田夢灯り」^{あか}というイベントで設営に参加しています。

学園祭



創部当時から行っている白鷺祭でのごみ分別活動

中百舌鳥キャンパスでは毎年2回、友好祭と白鷺祭が開催されており、環境部工口助は来場者の皆さんに気持ちよく過ごしてもらい、環境問題について知つもらうことを目的に活動しています。学祭活動は工口助発足当時からの活動であり、現在では景観保持

やごみの分別補助、子ども向けに環境啓発を交えたゲームや工作のブースを設け、ごみの体積削減のために容器包装を統一するエコパッケージを模擬店で使ってもらっています。

これからのエコ口助

以上紹介したものは活動の一部であり、実に多様な活動をしてきたかがわかると思います。2020年度は思うように活動ができず、もどかしく思っていましたが、2021年度はコロナ禍でも細々と活動しながら、これから活動の幅を広げられるように動きました。友ヶ島から海洋ごみ問題を考える団体「Seagurds」への参画、地元「大鳥大社」の清掃企画等々、大学統合後でも活動しやすい環境作りを行っています。

環境部工口助はこれからも部活として心地よいコミュニティであり続け、様々な環境活動を展開していくよう尽力してまいります。



担当：山本 恵一朗、齋藤 明
(環境部工口助副代表)



キャンパスビオトープの保全活動

里環境の会 OPU とは？

里環境の会 OPU（通称：さとかん）は、「人と自然のより良い関わり方を考える」というコンセプトの下、2011年から活動しているクラブです。

さとかんでは様々な活動を通じて自然を体験し、発見したことを部員同士で共有し、それを活かした実践や情報の発信などを行っています。現在の主な活動はキャンパスビオトープ活動、野外活動、勉強会の3つであり、ここではそれらの紹介をさせていただきます。

キャンパスビオトープ活動とは？

「ビオトープ」とは造語であり、多様な生物からなる生態系の機能を持った、まとまった空間のことを意味します。本学では生物相の豊かな中百舌鳥キャンパス全体をビオトープと位置づけ、自然と人間活動の調和を実現した空間を目指しています。約47haもあるキャンパスには水田や果樹園のほか、樹木が植栽された緑地帯やため池などの様々な環境があり、そこには植物・昆虫・鳥類・魚類など多くの生き物が生息しています。そこで、さとかんでは教職員と連携して生物多様性に関する調査、ショウブ池や府大池（正式名：園池）の保全活動、水質調査などを継続して行っています。これらの活動を通じて部員は人と身近な自然との関わりについて理解を深めています。

ショウブ池の保全活動について

ショウブ池は中百舌鳥キャンパスにある小さな池です。かつては、農業用のため池として利用されていましたが近年は使われておらず、人による管理が放棄されていました。しかし、残された環境には豊かな生物多様性が認められ、キャンパスビオトープ活動の中心的な位置付けとなっています。さとかんではショウブ池を生物に関する知識や経験を得られるだけでなく、保全に関して実際にどのようなことを行えばよいかを学べる場所として扱っており、ヨシ刈り、水質調査、生物調査などを継続して行っています。

ヨシ刈り

ショウブ池では年に2回（夏と冬）に繁茂するヨシを刈る活動を行っています。ヨシは水辺に生育するイネ科の植物で強い繁殖力を持ち、すぐにショウブ池全体を覆いつくしてしまいます。そのままでは陸地化してしまう可能性もあり、豊かな水辺がなくなることに繋がりかねません。これを防ぐためヨシ刈りを行っているのですが、夏と冬で別の目的があります。



まず、夏のヨシ刈りには水面の見える部分（開水域）を作るという目的があります。開水域があることでトンボが産卵のために池を利用したり水鳥が飛来したりします。また、見晴らしが良くなった池にはツバメなどの鳥類の姿が見られるようになります。このように、夏のヨシ刈りはショウブ池の生物多様性を高めることに繋がっています。

一方、冬のヨシ刈りには枯れたヨシが池の中に倒伏してヘドロ化し、ショウブ池が陸地化してしまうのを防ぐ目的があります。陸地化すると池に生息する水生生物が棲めなくなり、水鳥も来なくなるため生物多様性が低くなります。また、ヨシがヘドロ化するとショウブ池の水質が悪化し、池に棲む生き物が棲みにくくなります。このように、冬のヨシ刈りではショウブ池の生物多様性が低くならないよう、維持するということを重視しています。



チョウのルートセンサス

キャンパスビオトープ活動の一環として、中百舌鳥キャンパス内に生息するチョウをルートセンサスという方法で調査しています。これは予め設定した一定区間のルートを歩き、その間で確認できたチョウを記録するというものです。キャンパス内に生息するチョウの種類と個体数を把握するのが目的で、これまでにツマグロキチョウやコムラサキなどの希少種を含め多種多様なチョウが確認されています。また、チョウの幼虫は種ごとに食べる植物がある程度決まっており、この調査結果をキャンパス内の植生調査に応用するという目的もあります。

野外活動について

野外活動は実際に野外に出て自然と触れ合うフィールドワークであり、自然との関わり方を考えることを目的としています。部員が自由に企画を立て、自然観察をするために山や川に行ったり、博物館や水族館などの施設に見学に行ったりしています。中には鉢ヶ峰（堺市）におけるホタルの生息数調査など毎年継続して行っている活動もあり、さとかんの活動の主軸となっています。



矢田丘陵
(奈良県生駒市)
での野外活動

勉強会について

勉強会は部員が紹介したいことや他の部員とともに考えたいことをプレゼン形式で発表するという活動です。発表のテーマは基本的に自由で、幅広い分野の勉強会が行われるため、自然に対してさらに興味を持つきっかけづくりにもなっています。



環境職業説明会について

環境に関連する職業に就いているさとかんのOBに来ていただき、毎年、環境職業説明会を開催してきました（2020年度はコロナ禍のため中止）。ここでは例年、公務員、学芸員、研究所の職員、企業などさまざまな立場の先輩方から、自分の職業のことや職場での体験など本音で語ってもらっています。現役部員との交流も含め、貴重な経験が得られる場となっています。

これからの活動について

今日では新型コロナウイルスの影響もあり、なかなか対面での活動ができないという状況が続いています。また、キャンパスビオトープ活動を通じて得られた知識やデータを人に伝える機会も減少していると感じています。今まででは学園祭などでそれらをまとめて地域の方々を含め、多くの人たちに見ていただく機会がありました。そのようなイベントは身近な自然について改めて考えたり、疑問を持ったりする場所を提供できる機会であると考えており、“人と自然の関わり”を考えるきっかけになると思っています。

対面での活動が厳しい状況ではありますが、さとかんでは今まで以上に多くの人々に人と自然の関わりを考える場を提供できるよう努力していくと考えています。



(里環境の会 OPU)

大阪府唯一の村で棚田保全活動

下赤阪棚田ボランティア

ボランティア・市民活動センターV-station（通称：ボラセン）は、「何か活動をしたい」学生と、「学生の力を借りたい」地域の方々をつなぐ場です。主に学外において、福祉、災害、環境、国際、教育、文化、まちづくりなど多方面で、地域と密着したボランティア活動を行っています。今回は、その中から大阪府に残されている貴重な田園風景を保全する活動について紹介します。

千早赤阪村とボラセンのつながり

千早赤阪村は、府内最高峰の金剛山に隣接する大阪府にある唯一の村です。この村には、「日本の棚田百選」に選出された下赤阪の棚田があります。日本の農田風景が手つかずのまま残されており、サイクリングやツーリングに人気の場所になっています。秋には棚田の畦道に灯籠を並べてライトアップする「金剛山の里棚田夢灯り」が行われたり、農業体験や自然体験が行われたりもしています。



現在、耕作放棄地の増加や、農業従事者の高齢化とそれに伴う後継者不足により、深刻な農業離れが起きています。そのような潮流に呑みこまれず、この素晴らしい棚田を未来に残していくために、棚田保全活動が始められました。「下赤阪棚田の会」は山の斜面で米作りを行う棚田を多くの人に知ってもらい、保全活動を通して景観を維持していくため、1999年に地元農家15人によって設立されました。現在も、村外の方に長期にわたって米作りを知ってもらうため、棚田のオー

ナーとなって米作りを体験する「棚田オーナー制度」や、後継者育成を目指す実践型講座「大人の棚田塾」などを、棚田保全活動を支援するNPO法人「棚田ネットワーク」と連携して行っています。

ボラセンは、大阪府が「下赤阪棚田の会」と協力して運営する府民参加型の「棚田・ふるさとファンクラブ」にボランティアとして参加したことがきっかけで、直接保全活動に参加するようになりました。そして、「下赤阪棚田の会」会長のご厚意で、田植えや稻刈りといった稻作のメインとなる作業や、みかん狩り等のお手伝いもさせていただいています。ボラセンの有志メンバーで年に5回ほど訪問し、1年を通してボランティアをする中で、季節の巡りを感じながら農作業を体験することができます。

活動紹介①【田植え】



毎年6月上旬には田植えを行います。近年の田植えは機械を用いて行うのが主流となっていますが、棚田は複雑な形をしており、狭い部分やカーブになっている部分など、機械で植えるのが困難な所があります。そのような場所は、私たち学生が手で苗を植えています。素足で田に入り、手植えをするという貴重な経験をしました。

また、昔から長く続く神事として「早乙女の田植え」も行われており、私たちはそのお手伝いもしています。早乙女さんが音楽と掛け声に合わせて苗を植えていくこの行事では、私たちは植える位置を示すロープの提示や、早乙女さんに苗を渡す役割などを担っています。伝統行事に触れ、その魅力を肌で感じることができます。



伝統的な神事「早乙女の田植え」

活動紹介②【稻刈り】

稻が登熟した10月上旬には、稻刈りを行います。ここでも、機械で刈ることのできない場所にある稻を、私たちが鎌で刈っていきます。刈った稻は、前年の稻わらを使って束ねて括り、稻架（天日干しをする際に束ねた稻を掛ける木や竹でつくった台）に掛けていきます。

わらで稻を括る作業はコツが必要で、慣れるまでは苦労しますが、ここでも先人から受け継がれてきた技術を体験し、身につけることができます。



刈った稻を稻架で乾燥させる天日干し

＼もっと！／ 棚田保全活動

私たちが参加している活動は、田植えと稻刈り以外にもさまざまな活動があります。

「下赤坂棚田の会」の活動では、主にジャガイモやサツマイモの苗植えと収穫、畠の草刈りを行っています。この活動には、子どもに農作業を体験させたい親子連れの方々や、都会を離れて息抜きに参加する方々などが多く参加しており、活動を通して交流することができます。ジャガイモ、サツマイモは収穫後、地元の方がその場でふかしてくれます。棚田を眺めながら

ふかしたてのイモを食べると、一日の疲れも吹き飛び、お腹も心も満たされます。

また、作業中や休憩時間に地元農家の皆さん方とお話しすることも、この活動の醍醐味であると感じています。農家の皆さん方からは農作物の話を、私たち学生からは大学の話や趣味の話などをし、意見交換や団らんをします。地域間そして世代間の交流もできる貴重な時間となっています。

近年の日本では、下赤坂の棚田のような風景は貴重なものとなりつつあります。また、千早赤坂村でも人口の高齢化が進み、今後、農業の担い手が不足することが予想されます。私たちは、この美しい棚田の風景を守るべく、今後も地元の方々との交流を絶やさず、村での活動を継続していきたいと考えています。



「下赤坂棚田の会」会長（左端）とボラセンメンバー



担当：前田 泰輝、中尾 和佳奈

（ボランティア・市民活動センターV-station）

学生が活躍する大学に ～これまでの環境活動を振り返って～

「大阪府立大学」としては最後となる今回の環境報告書では、本学のこれまでの環境活動を振り返ります。

2009 年度から 2014 年度の 6 年間、本学の学長を務められた奥野武俊先生にインタビューさせていただきました。



奥野 武俊先生
(元大阪府立大学学長)

Q. 奥野先生が学長の頃、本学の環境の取り組みが盛んでしたが、その 1 つである「府大環境デー」について教えてください。

府大環境デーは、2012 年の世界環境デー（6 月 5 日）に行った講義で、私が提案して生まれたイベントです。この講義で、世界環境デーは日本とセネガルが共同提案してきたことを知らない学生が多いことがわかり、その認知度を向上させるため学生たちに提案しました。学生たちは熱心に企画し、私は UNEP（国連環境開発計画）に本学の様子を知らせるニュースを送り、他大学に参加を呼び掛けました。学生と教職員が連携した結果、2013 年度と 2014 年度に府大環境デーが実現し、本学と近畿圏の大学において環境活動を行う学生団体が活発に意見を交換し、交流を図る場となりました。



府大環境デーの参加者一同（2013 年 6 月）

Q. 「キャンパスビオトープ」が生まれた経緯や狙い、効果についてお聞かせください。

ビオトープとは Bio (いのち) と Tops (場所) とい

うギリシャ語を合わせた造語で、本来、生物群集の生息空間を示す言葉です。しかし日本では、小さな池を利用して箱庭のような生態系のモデルを作ることを意味していることが多く、残念に思っていました。

そのような思いを抱いていた 2007 年頃、ごみなどが多くて汚れていた中百舌鳥キャンパスの府大池（約 8,700 m³）を整備しようという動きがありました。そこで、ただ見た目をきれいにするのではなく、府大池が自らの機能でその環境を整えられるような、自然の力を活かした整備を目指しました。また、これをきっかけに教員・職員・学生がそれぞれの立場からキャンパスの自然環境に向き合えるよう研究会を設置しました。名称を「キャンパスビオトープ研究会」とし、府大池を中心とした緑の多い中百舌鳥キャンパスに、多様な生物と人間が共生する空間～ビオトープ～を作ろうと呼びかけました。

府大池の整備は当初考えていた以上に難しかったのですが、結果としてキャンパスの環境について、多くの人の理解を深められたと感じています。



キャンパスビオトープのコア 府大池

Q. 本学はベトナムでも環境活動を行っていますが、その内容を教えてください。

本学とベトナムの関係を深めるため、2009 年に始めたベトナム・ハロン湾の環境改善プロジェクトは、私にとって印象深い事業でした。このようなプロジェクトを始めるに当たり必要な資金を得るために補助金を探すのですが、政府系の開発援助は昔から道路や橋など「モノを作る」ことを主力にして行われてきました。



しかし、このプロジェクトではハロン湾の環境を改善するために「人を育てる」ことを提案して、JICA（国際協力機構）が採択してくれました。

実際の活動では本学の学生をベトナムへ連れて行き、現地の小中学生への環境教育や、青年団・婦人会の人たちとの連携、マングローブの植樹などを行いました。現地の人と同じ目線で考えながら問題の解決方法を探ることを大切にした結果、数年後には家庭などからごみは捨てられなくなり、ハロン湾岸の環境は良くなつたと思います。

小学生にハロン湾の環境を理解してもらう水質調査 →

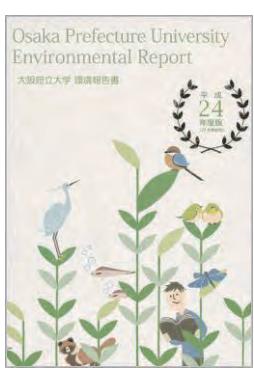


← 現地の人と共同で行う
マングローブの植樹

Q. E～きやんぱすの会の活動について、奥野先生はどのように評価されていますか。

環境報告書は、企業が社会的責任CSR (Corporation Social Responsibility) を果たすものに対し、大学ではUSR (University Social Responsibility) と位置付けられています。今から10年前は、ほとんどの公立大学では環境報告書は発行されていませんでしたが、本学では学生から環境報告書を作成したいとの提案がありました。学生が中心となって作る環境報告書はインパクトが強いと考え、E～きやんぱすの会として組織化をお願いしました。

そして、学生が主体的に原稿を作成して大学がサポートに回るという「府大スタイル」が生まれましたが、これが実現できたのは、現場で活動する学生、実現しようとする教職員、そしてこの動きを見て後押しをした執行部の3つの立場の人々が、同じタイミング、



記念すべき環境報告書
の初号（2012年度）

同じ想いで一致団結したからだと言えます。単なる学生サークル活動で終わらなかつたことがこれまで発行を続けてこられた大きな要因だと思います。本学の環境報告書が社会的にも高い評価を受けていることが誇らしいです。

Q. 奥野先生が進められた学生による環境活動の支援について、振り返ってその想いをお聞かせください。

私には、本学が「学生」が活躍してくれる大学であつてほしいという想いがありましたので、学長室に学生や市民に来てもらうようにして、広報、入試、防災などの問題について話し合いました。

私は「府大環境デー」のようなイベントだけでなく、大学として持続的な学生活動を行うことも大切であると考えています。そのためには、学生活動を「教育」と「研究」に結びつけることが必要です。学生活動と「教育」を結び付けて人材育成や地域貢献に取り組み、それを「研究」へ繋げることで、学生だけでなく教職員が一緒になって、その活動を持続していくことができるものと思っています。

一インタビューを終えてー

本学には学生による環境団体が複数あり、活動を行っていますが、振り返って、多くの方々の支援があることを再認識しました。奥野先生から伺ったお話は、新大学での学生活動のあり方を考える上で重要なと感じました。「学生」が活躍する大学であり続けるため、学生の環境活動とそれを支える大学の取り組みが継続・発展することを望みます。



担当：隅野 果歩、日下 安里紗
(E～きやんぱすの会)

学生団体 Honaikude 政策提案が優秀賞を受賞

優秀賞を受賞

関西広域連合では、若者世代の意見を同連合の政策に活かすことを目的に、同連合域内の大学生等からの政策提案を募集し、構成する自治体の若手職員等との意見交換会が実施されています。2020年度は12月5日（土）に、「大阪・関西万博を契機とした関西の地域創生」をテーマに開催されました。

大阪府立大学（以下、「府大」）と大阪市立大学（以下、「市大」）等の学生有志で構成する団体「Honaikude（※）」から2班が参加し、審査を通過した18チームの中、「水まわりリフォーム班」の提案した「水都大阪の新しい環境モデル都市化計画」が優秀賞を獲得しました。

Honaikude 代表を務めていた川岸啓人さん（受賞当時、府大/博士後期課程）は「今までの環境対策といえば、何かを我慢しないといけないような、環境保全と便利さを天秤にかけるものでした。そこで、知らない間に環境が良くなっているような、環境と便利さを両立した対策はできないかとメンバー同士でアイデアを出し合い、今回の政策提案に至りました。この受賞を励みに、5年後の万博に向けて活動を一層加速させていきたいです。」とコメントしました。

水まわりリフォーム班のメンバー



左列上から…
川岸 啓人（府大）、古田 悠真（市大）、名子 明朗（市大）
右列上から…
福羅 麗奈（帝塚山学院大）、佐田 彩夏（市大）、
樋口 喜則（神戸大）

提案の概要

環境問題といえば、なかなか行動しにくいということを課題に挙げ、大阪人の「ケチ」で「フレンドリー」という特徴に注目しました。魚と野菜を同時に育てる栽培法「アクアポニックス」と組み合わせ、次の3つの政策提案を行いました。

「My 魚、My 野菜システム」

飲食店でお客様に苗や稚魚を買ってもらい、生育・成長の様子をアプリで配信。食べ頃になるとお知らせし、再度来店された際にその作物や魚を食べもらいます。他のお客さんの作物を食べもらい、代わりに苗や稚魚を寄付してもらうこともできます。

「コンポストポイント」

テイクアウト店で生分解性容器の利用を促し、協力店で食べ物を買うとポイントが溜まります。その容器を商店街に設置されている専用のごみ箱（コンポスター）に入れるとまたポイントが溜まり、協力店で利用できる商品券やクーポンに交換できます。

「共有アクアポニックス畠」

街のなかに大規模なアクアポニックスを設置し、飲食店で共有します。道行く人が栽培の現場をビオトープのように見ることができ、自然と共存する大切さを実感できます。

担当：丸井 恵里加（E～きゃんぱすの会）

具体案

環境保全×お得な制度



意見交換会で示した提案の全体図

*学生団体「Honaikude」とは

2025年大阪・関西万博に向けて、「万博で大阪の学生の本気見せたるで！」というスローガンのもと大阪の地から若者や大学・高専の力で貢献すべく市大と府大を中心とした学生有志で構成しているプロジェクトチームのことです。